

もくじ Contents

- 3 市長あいさつ
- 4 特集
民生委員・児童委員は
“あなたのまちの相談役”
- 7 市政だより
 - 第3次津山市生涯学習推進計画
 - 平成22年度一般会計当初予算
 - 箕作賞
 - 地域チャレンジ! 公募提案型協働事業
 - 保育園(所)の特別保育
 - リサイクル・分別方法に関するパブリックコメント
 - 下水道使用可能区域拡大
- 16 ふおとほっとるぼ
 - 新津山洋学資料館開館式
 ほか
- 18 みんなのページ・ちゃい
 - お・た・よ・り
 - つやまっ子に贈る100冊の本
 - きらめく津山人
 - イラスト・絵手紙
 - 広報クイズ
- 21 としょかん
- 22 こどもひろば
 - 津山ラグビースクール
 - じどうかん
- 23 けんこう・そうだん
- 24 けいじぼん
- 30 くらし
- 32 Albumあの頃の津山

江戸詰の津山藩医を務めた玄随、玄真、榕菴は、宇田川家三代と呼ばれ、日本に近代科学を紹介したことで有名ですが、その後の宇田川家はどうかだったのでしょか。今回は、榕菴以降の宇田川家について紹介したいと思います。

榕菴の後を継いだ興斎の時代には、外国船が相次いで近海に現れ、海防のために洋学者の役割が大きくなっていました。興斎も、ペリーが来航した時には箕作阮甫とともに国書の翻訳にあたり、ロシアからプチャーチンが来航すると幕府の応接使に随行して下田に赴くなど、外交に携わっています。

また、オランダ語に替わって英語の重要性が高まっていることに気付くと『英吉利文典』という文法書を翻刻刊行し、洋学者たちの英語学習を助けたのでした。

明治維新の前夜、文久2年(1862)から明治5年(1872)までの10年間は、藩主の命令で津山に移り住んでいます。江戸で勉学を教えた弟子で、初保の医師・仁木永祐は興斎を度々訪ねていて、興斎が東京に戻る時には、愛用の薬筆筒を贈られています。興斎にとって、江戸の動乱を遠く離れた津山で耳にする日々は歯がゆいものだったかもしれません。それでも薬筆筒を見ていると、かつての弟子との交流が、そんな興斎の思いを慰めていたのではないかと感じられるのです。

興斎の長男・準一は、21歳で明治を迎え、大阪開成所(明治政

洋学博覧漫筆
～ 宇田川家のその後 ～

府が設けた洋学教育研究機関(1874)に東京師範学校の教師となりました。『物理全志』や『化学階梯』(小学)読本』など多くの教科書を刊行し、明治の文明開化を物理や化学の分野で支えました。宇田川家は、幕末から明治にかけても、学問の家としての大きな足跡を残しているのです。



▶興斎が仁木永祐に贈った薬筆筒。左は筆筒の裏(津山洋学資料館寄託)